

棄余兮。薄序韻事。以遂後塵。挹蕙葭之零露兮。霑余衣之瀼瀼。水妃識余之悱惻兮。步嬋媛其來將。指王孫之墳墓兮。喚白鷺而誦歌。望麗都以揚靈兮。緬懷古而婆娑。獨留中洲以容與兮。曷爲惆悵而夷猶。擊荃橈以歎訪兮。橫大江而放遊。系曰。江水兮安流。日夜兮泮泮。玄鶴飛兮月明。願坡仙兮相羊。

芳芳縹渺。嗚々乎湘累之遺。

呂增祥拜讀

九 日

全

夫。秋。之。氣。爲。金。於。理。爲。義。廉。厲。肅。殺。俾。秋。士。悲。傷。矣。蓋。聞。人。在。陽。則。舒。在。陰。則。慘。慘。則。尠。于。歡。矧。余。作。客。十。月。張。々。勞。々。指。孤。鴻。而。寄。情。望。飛。雲。以。騁。思。節。值。重。陽。芳。菊。發。英。秋。興。不。禁。登。高。舒。嘯。

寥廓激灑。天山如爽。明遠林斷。飛鳥游雲散。秋城悠々。纖礙絕。森々萬象。橫登高。騁逸興。慨然傷我情。長嘯多落木。哀颺晚柯鳴。幽巖露奇姿。青松抱餘清。芳菊耀霜下。可餐彼落英。俯仰歎緬邈。舉世嘲秀貞。持醪聊自慰。憂來觴難傾。昔賢良已杳。惆悵誰與行。

本田種竹曰。雨山專攻五古。超過等儕。象口殆無異辭。如茲篇。雅麗修潔。接武古人。足令人傾倒。

硯友會歌詩

兼題野時雨

雲たえて阿蘇は夕日のさまなから時雨ふるなりたくまの原

蘆 月

評曰、ををしき姿ありいとよし

かれはてし淺茅の野邊をめぐりつゝ何そむるとや時雨ふるらむ
雲まよふ遠の松原見えかくれ音たてゝふる野へのむら雨
秋風の身にしみてふくあき田野にめぐりふりきぬ峯のむらさめ
心あらはいたくなふりを村時雨もみちのにしき色やあせなむ
たぢめくる阿蘇の裾野のむら雲や峯の時雨の名残なるら
狩衣ぬれつかわきつ幾度か枯野の原にまくれふるなり
末遠きすそのゝ草に聲たてゝまたも時雨のめぐりきにけり
かれはて玄野邊の千草のつゆけきはまくれし雨の名残なりけり

雲間紅葉

夕日影うつる端山にたつ雲の袖のにしきは紅葉なりけり

源氏物語、巧妙

山あらし吹なはらひそ白雲のかゝるゆふ日の峯の紅葉
立並よふ峯のむら雲まくるらしはしよりそめてにはほふ紅葉
かくてこそ色もはえあれ立田山雲のいろどる峯の紅葉
龍田山さすや夕日の雲間よりにはほひをそ添ふ峯のみま紅葉
送ら雲のたえまゝにあらはれて名にもたつたのみねの紅葉

冬獸

一 心

ねほき

基 紀

せいせ

やまひと

おほき

蘆 月

蘆 月

基 紀

心

やまひと

水

夜あらしにちるやみやまの紅葉のふす猪の床やにまきなるらむ
霜さえて月影こぼる冬の夜のたくまの原に狐なくなり
ふる雪に子やれもふらむさすかにもあはれ狐の夜たなくなり

立秋

吳竹の一夜にあきや立ちぬらむ昨日にかはるをさのうはかせ

評曰、めてたし

淺茅生にけさ置きそめし白露の人の身にしむ秋は來にけり

秋夕

入相の風にちりゆく桐の葉に秋の聲する里の夕くれ

秋夜

さえわたる霜のさむさにねさめしてたきあかす夜は長くもある哉

兼題早行

鷄鳴啾々五更頭。路人平沙一水流。煙鎖江村人未起。一痕殘月荻蘆秋。

宿友人山莊

秋高天若水。白露滿前庭。清絕還奇絕。松聲和月聽。

全

涓々溪水鳴。白月滿高閣。應是鶴歸巢。松梢片雲落。

望蘇山

一 心
樂山人

蘆 月

玄はう
基 紀
やまひと

石川芝峯

西偏靈山是此山。振衣何日得躋攀。崢嶸雲矗三千丈。插在秋煙一色間。

早行

鷄聲叫曉月漸蒼。橋畔霜寒不耐行。誰識遊士征途恨。滿天風露出豐鄉。（豐鄉言豐前）
客窓難寢夢頻驚。又理行裝發未明。落木無邊秋一色。征鴻不斷月三更。前程四百頭將白。
故國六千空引情。欲進不之回首處。冷風吹送曉鐘聲。

雜吟

石川芝峯

、雨中臥病

久伏病床髮若麻。不憂病勢日相加。關心只是今宵雨。窗外明朝多落花。

、偶成

起蚤求食桑初榮。庭院無人燕語長。四月青山春已盡。瓶花一片落無聲。

○春雨渡口

渡口春寒風勢雄。落花撩亂滿篷中。篙子貪眠呼不起。滿簑紅雨夢還紅。

○出遊

和風漸至動吟魂。自此閑人春事繁。日陰淡煙雨。余路鶯啼紅。靄落花門。水重山。複雨三里。
犬臥牛眠四五村。料識武陵避秦處。青松翠竹別乾坤。

、聽杜宇

蒼々落月照柴門。深院寥寥影自昏。杜宇一聲知那處。家山歸夢杳無痕。